平成27年度学内版 GP　成果報告書

<table>
<tr><td>取組名称</td><td colspan="3">アジア圏学生のためのボーダーレス畜産教育プログラム
～学生の内向き志向の打開を目指して Part 3～</td></tr>
<tr><td>実施組織
（または対象のカリキュラム）</td><td colspan="3">農学部</td></tr>
<tr><td>※連携する他学部・機関がある場合は記入</td><td colspan="3">タイ国立スラナリー工科大学農業技術学部、バングラデシュ国立バングラデシュ農業大学、インドネシア国立ジャンビ大学畜産学部</td></tr>
<tr><td>実施責任者（所属）</td><td colspan="3">神　勝紀　　（　　農学部　　）</td></tr>
<tr><td>取組の目標</td><td colspan="3">1. 学生の内向き志向打開
2. 学生の研究教育におけるグローバル意識の向上
3. 海外学生の本学への進学意欲刺激</td></tr>
<tr><td>1.
目標達成のために行った活動と成果
（箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする）</td><td colspan="3">1. タイ国立スラナリー工科大学、バングラデシュ国立バングラデシュ農業大学およびインドネシア国立ジャンビ大学（いずれも交流協定締結大学）から学生を招聘した。
2. 海外学生には AFC 野辺山ステーションおよび伊那キャンパスで本学科学生とともに実習・授業・ゼミを受講させた。さらに畜産学関連の研究室にも訪問させ、特に大学院教育の質と特徴についてアピールした。
3. 伊那キャンパスで開催された国際シンポジウム「東南アジア圏国際畜産学シンポジウム」に全員招待し、ディスカッションの場面で活発な意見交換を行って各国固有及びアジア圏共通の畜産学的課題について理解を深めた。
4. 農学部の国際交流活動（イングリッシュサロン、グローバルサロン）、本学科学生とのエクスカーションおよび食事会を通じて交流した。これらには合計 60 名以上の学生が参加した。
5. 上記の活動において使用された言語は英語のみで日本語は全く使用されなかったが、参加した学生は SNS 等を利用しつつ放課後や休日に機会を作って積極的に交流した。
6. 学内版 GP に加えて、日本学生支援機構の海外留学支援制度および農学部国際交流事業（上記の国際シンポジウム）にも採用されたことから、この 3 つの事業を同時期に開催した。そのため、規模の大きい取り組みとなり、周囲に多大なインパクトを与えることができた（招聘学生 12 人、招聘教員 2 人）。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2.
目標達成度に関わる所見と今後の展望

（達成の度合いを選び，そう評価する理由と今後の展望を記述）</td><td rowspan="2">a. 達成できた
b. おおよそ達成できた
c. 半ば達成できた
d. おおよそ達成できなかった
e. 達成できなかった</td><td colspan="2">（そう評価する理由）
1. この取り組みは英語しか使えない状況で実施したが、留学経験（平成 25 年度学内版 GP の成果）のある学生の助けもあって、言語が障壁となる場面は殆どなかった。
2. 昨年も学内版 GP で海外の学生を受け入れているために、教員、学生、事務職員にノウハウがある程度蓄積されており、大きな混乱はなかった。
3. 国際意識の高い学生が増えており、エクスカーションや食事会のための準備や学生間の連絡は、本学科学生によって自主的に行われた。
4. 本学科学生から、参加大学の一つであるスラナリー工科大学への留学希望が出された。
5. 参加した海外学生の多くから本学への進学希望が出された。ただし、これは奨学金（少なくとも授業料全額免除）が得られることが前提となっており、実現のためには多くの課題がある。</td></tr>
<tr><td colspan="2">（今後の展望）
1. 本年度は、本学部の浜野充講師の国際教育プロジェクト「講義とフィールドをつなげたアクティブラーニングの促進」が学内版 GP に採用された。これは本取り組みをベースとして、さらにアクティブラーニングの側面を強化・発展させたものである。
2. この活動に参加した本学科の学生2名が国際交流に強い興味と意欲を示し、本年9月初旬から来年 1 月中旬まで、タイのカセサート大学とスラナリー工科大学（上記の通り）で卒論研究を実施することになり、現在手続き中である。</td></tr>
</table>